「おだいすくさま」跡隠しの雪

平成二十七年十二月十七日　於加茂法話会

時米・・・「お時米」誤字ですね、「お斎米」と書きます。斎（とき）とは本来年忌法要などの仏事が終わった後に頂く食事のことです、寺院で生活する僧侶の食事のことを斎（とき）と読んでいました。寺院での僧侶の食事ですから、基本的に精進料理です。お寺にあげて頂くお米を「斎米（ときまい）」といいます。昔はお米を出してましたが今は金銭を１２月末にまとめて持参してます。

「おだいすくさま」の日・雪降ると「おだいすくさま」の跡隠し。
もち米の粉・団子、小豆、箸は、柳のはし。
火傷して、手がなかった。

大師講型は、十一月二十三日にダイシ様が村を訪れる。小豆粥・団子・大根などを供える。
この夜はダイシが、かならず雪を降らせそこで各家では、これは巡歴のダイシをもてなすために、これをダイシコブキ(大師講吹き)、アトカクシ雪などという。隣家の畑に食物を盗みに出た貧しい老婆の足が不自由であるので、ダイシがその足跡を隠すために降らせた雪だといわれる。

シモツキガユ(霜月粥)などと称して小豆粥や大根を煮たり、団子を作って、人々は眠らず夜寵りをして、来訪するダイシを迎え祀る。このダイシは神の子(オホイコ)であって、われわれの先祖がまだ冬至という暦法上の言葉を知らない前から、一陽来復の季節を感じて新たなる神の子を迎え把ろうとしたのが、その起原であると考えられている。霜月二十三日の前後は、月の半分がようやく暁に現れて、やや傾いた形で仰ぐ時期となり、それが冬至にあたる。そして日本海側では、その夜はかならず雪が降るとされた。しかも、雪はしとしとと静かに降るのではなく、普通に強風を伴って、海辺のあたりならば海が荒れるとされた。これは大師講吹きと呼ばれている。日常ではあまり経験しない強風は神の来臨の兆候であり、積雪は来臨した神の証しと受け取れるものである。そしてこの大師講は、旧暦十一月に先祖神リ回の神を迎えて行われる農家の収穫感謝祭、つまり村々の新嘗の祭(霜月祭)と起原をひとつにするものと考えられている。

秋田県鹿角市花輪では、おでぇしこ（大師講）には、おでしこ粥をつくり、それをヨシの長いはしで、子ども孫などに食べさせた（新田町）。二十四日、弘法大師が吹雪の中で来臨するといい、小豆粥を長いはしを添えて供え、そして食べる。「大師講雪」として、「大師が子供がたくさんあったので、その子供に食べさせる物を盗んで子供たちに食べさせた。ところがその盗んだ跡がみつからぬようにと、大師は呪文を唱えて、大吹雪にして雪の家から足跡を消して、足跡をかくしてしまった。それで大師講のある日は、必ず大吹雪になるというので、大師講堂（雪？）ということがいわれている。

旧暦十二月二十三日：かまどの神を祭る日　（「祭竈節」「送竈」）
どの家族にも必ずかまどがあります。かまどには一人の神が一年中駐在し、その家族の行動を観察します。二十三日になると竈神は、一年間近く観察していたこの一家の諸事をつぶさに上司へ報告するために、天に昇る旅をはじめます。その上司とは「玉皇上帝」のことです。「玉皇上帝」は竈神の報告を聞いて、その一家の善悪を判断します。善行が多ければ幸福を授け、悪行が多ければ厄災を科します。人々は竈神のご機嫌をとるために、（甘い報告）をしてもらうために小豆と餅を供えるわけです。その餅は結構粘っていて、それを口に入れるとろくに話ができないほどです。竈神にそのあまい餅を食べてもらって、ねばねばで多く喋らないようになることを図っているでしょう。なお、あまい餅「善哉・ぜんざい」は子供たちがもらいます。この日で一番喜ぶのは竈神ではなく、子供たちでしょう。

正壽寺住職　呉　定明合掌